

令和 6 年 6 月 3 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00455

研究課題名(和文)近代日本の海洋文化振興における英国モデル転用についての比較文学的研究

研究課題名(英文)Anglo-Japanese Encounters and Exchanges in Modern Maritime Culture

研究代表者

橋本 順光 (Hashimoto, Yorimitsu)

大阪大学・大学院人文学研究科(人文学専攻、芸術学専攻、日本学専攻)・教授

研究者番号：80334613

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：開国以来、日本では海運復活が叫ばれた。特に1890年代の海軍拡大の際、倭寇が英国の私掠船のように再評価された。機運を後押ししたのは、アレクサンドロスと海賊の逸話であり、James Murdoch (1903)が発掘した倭寇によるJohn Davis殺害事件だった。竹越与三郎(1920)がこれらに基づき、鎖国がなければ日本は東アジアに一大帝国を築いていたという幻想を流通させ、それは日英同盟の更新が議論されていた時期に、元海軍中将Ballard(1921)によっても踏襲された。バラードの倭寇評価は自国の軍備増強のためだったが、途絶した帝国復興の宣伝に有益として、彼の主張は頻繁に引用された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アレクサンドロス大王と海賊の逸話は、元々はキケロに由来し、アウグスティヌスによって広められた。軍団を使用しての侵略が皇帝なら許されるのに対し、小規模な船による略奪は海賊として弾劾されるという批判は、例えば帝国主義とテロリズムは区別できないとするチョムスキーの『海賊と皇帝』(2002)にまで継承されている。この逸話が、ピーター・パーレーの『万国史』や『パーシー逸話集』など、明治期に教科書でもよく読まれた作品で紹介され、倭寇の再評価に援用されたことはこれまで指摘がなかった。このことにより、近代日本の海洋国家構想と海洋文化振興を、世界史的・現代的な意義の下で再考する視点がもたらされると期待されよう。

研究成果の概要(英文)：Since the opening of Japan(1854), maritime culture has been promoted in the country. In line with the naval expansion of the 1890s, the wako, or Japanese pirates in the 17th century were evaluated as being the vanguard of an overseas expansionist movement, similar to the British privateers. This inclination was encouraged when anecdote about Alexander the Great and a pirate was being circulated through Peter Parley's Universal History, as well as via the murder of John Davis by Japanese pirates, as popularized by James Murdoch (1903). Takekoshi Yosaburo (1920) established the contention that Japanese pirates would have built an empire spanning East Asia if a policy of isolation had not been implemented. This contention was repeated by former Admiral Ballard (1921) when the renewal of the Anglo-Japanese Alliance was being discussed. Ballard's assessment was intended to highlight the importance of the Royal Navy; however, his account was used in Japan to stimulate Japanese imperialism.

研究分野：比較文学

キーワード：倭寇 朱印船 アウグスティヌス ピーター・パーレー パーシー逸話集 ジョン・デイヴィス ジェイムズ・マードック 鈴木秀次

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

日本を島国ではなく海洋国家として顕彰し、その存在感を高める必要性は、開国以来、日本で繰り返されてきた。覇権と通商のどちらを重視するかの違いはあっても、そのモデルとして参照されたのは英国であった。

日本の海軍は英国を模して整備されただけでなく、多くの軍艦が20世紀初頭まではもっぱら英国に発注されてきた。国策に沿って航路を開発した半官半民の日本郵船も、英国の非公式艦隊と呼ばれたP&O会社を念頭において創設されている。橋本・鈴木『欧州航路の文化誌』(2017)や木畑『帝国航路を往く』(2018)が詳述したように、事実上、日本の欧州航路をはじめ主要な航路は、英領の寄港地をたどり、P&Oの東洋航路を遡ることで形成された。

一方、英国の寄港地に依存せず、輸送と移民に特化したのが大阪商船である。インド航路で綿を輸入し、大阪の綿業を支え、大阪商船はその製品を世界に送り出した。1920年代以降は、東アフリカ航路を開発し、さらにブラジルまで西回りで航路を整備することで、移民政策を支えた。こうした路線拡大を決定づけたのは日英同盟の破棄である。軍艦が国産可能となったものの、主力艦の建造が制限されたため、軍艦に転用できる民間船の重要性が増したことも大きい。事実、海運報国を熱心に唱えた社長の村田省蔵は、東洋における英国の海洋覇権を失墜させることが目標と公言し、英国の雑誌でもたびたび紹介されていた(Hashimoto, *Caricatures and Cartoons: A History of the World 1931-40*, 2020)。

ただし、村田らが英国に対抗するために奨励した海洋文化振興もまたモデルは英国であった。こうした振興は、1890年代の海軍拡大を背景とし、台湾が植民地となり南進論が盛んになって以降、官民一体で進められた。その際の定型は、江戸時代の鎖国ですっかり海運も海外雄飛の精神も衰退し、海洋文学が欠落したことを嘆く一方で、古代中世において日本が海国だったことを強調し、その復活を奨励するというものである。

この原型を流布させたのが作家の幸田露伴である。露伴の「海と日本文学と」(1900)は教科書にも採用されたが、その露伴が海洋文学のモデルとしたのもまた英国であった可能性が高い。露伴は、英国の人気海洋小説家ラッセルなどを参照して1903年に『天うつ浪』に着手するが、未完に終わってしまう(橋本「欧亜にまたがる露伴」2019)。ヴェルヌの『海底二万マイル』(1870)を思わせる矢野龍溪の『浮城物語』(1890)も、完結することなく途絶したことはよく知られている。確かに矢野龍溪を引き継ぐようにして押川春浪は軍艦をユートピア的な共同体として描き、その『海底軍艦』(1900)のような戦記小説は、大いに流行した。しかし、かつては隆盛していたとされる海国日本の歴史を描く小説で広く人気を獲得した小説となると、高垣眸の『龍神丸』(1925)まではほとんどなかったといえる。

ただし、高垣自身が後年に認めたように、『龍神丸』は、スティーブンソンの『宝島』(1883)を村上水軍に置き換えた翻案小説であった。こうした翻案は高垣だけではなかった。『龍神丸』の成功以降、大仏一郎や南洋一郎など、1940年代にいたるまで『少年倶楽部』で人気を博した冒険小説家は、多かれ少なかれ、英国の海洋冒険小説を倭寇の小説へと巧みに翻案していた。そうすることで、日英同盟失効以降の海運振興と軌を一にして「海国男子」を鼓舞したのである。

## 2. 研究の目的

こうした日本における海洋小説の系譜は、尾崎秀樹『海の文学志』(1992)で挿話的にまとめられているが、一般書の性格上、英国文学への目配りはほとんどない。倭寇の表象も、日本史研究のなかで批判的に言及されることが多く、表象自体への研究は十分になされてこなかった。例えば田中健夫は、日本帝国の先遣隊として過剰に評価された倭寇像を批判し、多民族集団としての側面を指摘して戦後の倭寇研究を牽引したが、当然ながら、倭寇像の変遷そのものを目的とはしていない。

海洋文学の振興が叫ばれた後、『浮城物語』(1890)から『龍神丸』(1925)までのあいだにどのような変化が起き、倭寇や水軍が目目されるようになったのか。この時期は海洋文学の規範として参照されていた英国と同盟が結ばれ、その同盟が廃棄された時期とちょうど重なる。20世紀初頭、倭寇が17世紀英国の私掠船のような通商の拡大を支えた先駆者として再評価が始まるとは、田中健夫の指摘である(『中世海外交渉史の研究』1959)。この指摘以降、宣伝や戦意高揚ではない倭寇研究が盛んになっていくが、倭寇の図像の再発見とその流布の過程などを別にすれば、倭寇評価の経緯自体は、十分に研究されることがなかった。この指摘は、日本の海洋文化振興や日英同盟との関連という文脈でもっと注目されてよいだろう。

このような研究状況を踏まえ、本研究では、近代日本で英国をモデルとして海洋文化がどのように振興ないし転用されたのかを目的とする。その際には、日本側の歴史的な文脈や転用を調査するだけでなく、さらにそれが英国でどのようにとらえられたのか、日英の相互交渉の解明も目標となる。そこで研究期間と予算に応じて、具体的に以下の3つの作業に分類し、調査と成果発表を行った。

第1の作業が、近代日本における倭寇再評価の経緯の解明と、日英同盟との関連である。倭寇はどのように再評価され、英国側のどのような資料が倭寇の再評価に援用されたのか。その経緯を調査し、そうした倭寇の過大な評価が、日英同盟の更新時期とどのように関連していたのかを探る。

第2の作業が、近代日本の航路をめぐる歴史的な文脈の解明と、海洋文化の具体的な事例の発掘である。海洋文化を支える基盤である航路が近代日本で展開した歴史的な意味や文脈を解明し、その航路によって運ばれていった具体的な事物の様相を探る。

第3の作業が、こうした航路を渡った人々の残した記録と表象の分析である。航路の発達によってこれまでにない人々が日本から海外に渡り、その強烈な経験をどのような方法で描いたのか。英語圏での事例と比較しながら、その影響や特徴を指摘する。

### 3. 研究の方法

歴史的な文脈や表象の解明については、国会図書館のデジタルコレクションほか各種データベースでの調査を踏まえて、関連する日英の古書・研究書を購入ないし閲覧する。外交資料としては、アジア歴史資料センターのデータベースほかで予備調査を行い、英国の公文書館ほか関連機関で調査し、日英双方の資料を照合する。両者を架橋する資料として、該当時期の雑誌や新聞などの資料も適宜、購入ないし閲覧し、調査を行う。

### 4. 研究成果

3年間の研究成果として18本の口頭発表を行い、13本の論文を刊行した。口頭発表は内容と機会に応じて日本語ないし英語で発表し、基本的に活字化を前提としている。

第1の作業の主な成果としては「倭寇物語の創造」が挙げられ、ほかの論文として「1920年代を中心とした在日外国人をめぐるネットワークの点描」<sup>1</sup>、「Two Faces of A. K. Hasheem」<sup>2</sup>が、口頭発表では「「からゆき」の改変」<sup>3</sup>、「日本の女海賊の物語はどのように生まれたのか？」<sup>4</sup>が挙げられる。

倭寇が再評価されたのは、日清戦争のいわゆる黄海海戦を契機としていと考えられる。その際、従来の「倭」や「寇」の境界や意味を再考する視点を提供した遠因として、アレクサンドロス大王に反論した海賊の逸話が無関係ではないことが判明した。海賊と海軍は規模の違いにすぎないというこの逸話は、ピーター・パーレーの『万国史』や『パーシー逸話集』を通じて明治の初期から知られており、倭寇の再評価に際してしばしば援用されたからである。倭寇を描いた物語はなかなか作られなかったが、ジェームズ・マードックが『日本史』(1903)で取り上げた倭寇によるジョン・デイヴィス殺害事件(1605)は種々の題材となった。

あたかも倭寇が東洋全体に植民地をもっていたかのような言説を流通させたのは竹越与三郎である。こうした倭寇評価は、英国の元海軍中将バラードによる*The Influence of the Sea on the Political History of Japan* (1921)にも見られる。竹越との関連は未解明ながら、バラードは、日英同盟の更新をめぐる議論されている時に、日本の潜在的脅威を強調するために倭寇を過大に評価した可能性が高い。一方、1930年代になると、鈴木秀次海軍大佐を中心として、ジョン・デイヴィス殺害事件は最初の日英海戦として注目され、バラードの記述も倭寇の実態を示す傍証としてしばしば利用されるようになっていく。

第2の作業の主な成果としては「グローバリゼーションー世界を呑み込む万国博覧会」と「植物のジャポニスム」があり、ほかの論文として「松村昌家著『水晶宮物語』の余白に」<sup>5</sup>、「朝顔をめぐる英語圏のジャポニスム」<sup>6</sup>、「明治日本を描いた水彩画の展覧会の余白に」<sup>7</sup>が挙げられる。

ロンドン万博(1851)は英国による世界規模の流通網を背景に成立しており、その象徴として水晶宮は注目され、百貨店やショッピングモールの原型として参照された。この水晶宮を設計したパクストンは、温室でバナナの栽培に成功し、キャベンディッシュと名づけられた同種は、今なお世界でもっとも流通するバナナとなっている。輸出先の国に従属してしまうモノカルチャー経済の国は「バナナ共和国」と呼ばれることがあるが、この名称は作家O・ヘンリーの小説(1904)にまでさかのぼる。同時期、日露戦争に従軍していた鷗外が、蚕のように生糸を輸出しているだけなら日本は非難されないと「黄禍」の詩を詠んだのは、ヘンリーの「バナナ共和国」批判と同じ文脈で考えることができるだろう。

一方、そうした一次産業の輸出品で特記すべきは花卉である。外国に産物を提供するだけでなく、それらを販売する国内業者が活躍し、ひいては日本庭園という文化とその技法を広める下支えとなったからである。例えば明治時代の朝顔の輸出は、英語圏において園芸・工芸・文芸と横断的にジャポニスムを生み出し、いずれの分野でも加賀千代の句が言及されていた。そうした輸出業者の代表である横浜植木は、欧米の業者の販路を逆用して置き換わった点で、日本郵船の航路開拓と共通している。フランスのエドモン・ド・ロッチルドの日本庭園が横浜植木の流通網を基盤にしていた点についてはすでに指摘があるが(鈴木順二『園芸のジャポニスム』2023)、その後には作られたイギリスのレオポルド・ド・ロスチャイルドの日本庭園も同様の可能性が高い。

第3の作業の主な成果としては「露営の夢の行方」があり、ほかの論文として「世界を股にかけての旅稼ぎ」や「芸術家としての蜘蛛の系譜」などが挙げられる。

多数の兵士が異国の戦場で露営するというのは、およそ近代になって初めて広まった経験であるが、その表象も英語圏と密接に関係していた。たしかに旅先で故郷を夢見ること自体は唐詩でもおなじみの古くからの主題であり、戦場での望郷もその延長と考えられる。ただし、兵士が露営の際に夢で故郷の家族に再会するという主題と画題は、トマス・キャンベルの詩「兵士の夢」（1800年頃）とその図像に多くを負っている。詩自体は、日清戦争以前から紹介されていたが、日清戦争によって同じ体験が共有されることで、詩もそれを描いた絵も格段に増えていった。小林清親の《征清軍休戦野営之夢》（1895）はその典型で、キャリアー&アイヴズ社の《兵士の夢》を参照にしたと考えられる。

日露戦争は露営の夢の流布にさらに拍車をかけ、なかでもフランスのエドゥアール・ドゥタイユによる《兵士の夢》（1888）が紹介されることで、露営の夢を描くことは厭戦ではなく、戦意高揚の図版として幾度となく転用されることになった。このように海外雄飛の尖兵の表象においてさえ、英国のモデルが転用されたことは注目してよいだろう。ただし独自の展開がないわけではない。1930年代後半の日中戦争期になると、軍歌の代名詞ともいえる「露営の歌」（1937）がよく示すように、戦死して家族と再会するという展開が広がっていく。図像においても国防館銃後室に飾られた小早川秋聲の《銃後の夢》と《夢に通う》（1941）では、夢の中で家族が英霊という死者と再会するという形式へと変化していることがうかがえる。つまり、日本においてキャンベルの厭戦的な望郷の詩の紹介から始まった露営の夢は、ここにおいて国家へと統合されたということができるだろう。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 橋本 順光	4. 巻 1
2. 論文標題 倭寇物語の創造：近代日本における海賊の発見とジョン・デイヴィス殺害事件（1605）	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 人文学林	6. 最初と最後の頁 143～164
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/95137	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Hashimoto Yorimitsu	4. 巻 0
2. 論文標題 Two Faces of A. K. Hasheem in Colombo: Intelligent Tourist Agents Navigating the Waves of Anglo-Japanese Relations	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Peter Hajdu et al. eds, Literatures of the World and the Future of Comparative Literature (Brill)	6. 最初と最後の頁 37～50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1163/9789004547179_006	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本 順光	4. 巻 0
2. 論文標題 グローバル化と世界を呑み込む万国博覧会	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 喜多千草編著『20世紀の社会と文化』ミネルヴァ書房	6. 最初と最後の頁 9～30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本 順光	4. 巻 1
2. 論文標題 1920年代を中心とした在日外国人をめぐるネットワークの点描：バラカトゥラー、グルチャラン・シン、イネ・プリンクリー、ポール・ジャクレーとその資料紹介	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 大阪大学大学院人文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 51～75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/94799	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 橋本順光	4. 巻 1
2. 論文標題 「朝顔をめぐる英語圏のジャポニスム - ガーデニングから禅まで」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ジャポニスム学会編『ジャポニスムを考える』思文閣出版	6. 最初と最後の頁 204-229
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本順光	4. 巻 1
2. 論文標題 「透明人間現る - 隠れる物語から露わにする物語まで」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 一柳廣孝・大道晴香編著『怪異と遊ぶ』青弓社	6. 最初と最後の頁 156-191
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本順光	4. 巻 1
2. 論文標題 「芸術家としての蜘蛛の系譜 - 蜘蛛の巣という小宇宙をめぐる詩作の比較文学」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 稲賀繁美 編『蜘蛛の巣上の無明 インターネット時代の身心知の刷新にむけて』花鳥社	6. 最初と最後の頁 3-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本順光	4. 巻 20
2. 論文標題 「松村昌家著『水晶宮物語』の余白に - ヴィクトリア朝文化研究の基点と展望」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『ヴィクトリア朝文化研究』	6. 最初と最後の頁 7-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 橋本順光	4. 巻 42
2. 論文標題 「植物のジャポニスム - 庭園・植木会社・水彩画をめぐる研究とその課題」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『ジャポニスム研究』	6. 最初と最後の頁 118-125
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本順光	4. 巻 42
2. 論文標題 "Botanical Japonisme: Japanese Gardens, Plant Nurseries, and Watercolour Paintings"	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Studies in Japonisme	6. 最初と最後の頁 126-131
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本順光	4. 巻 0
2. 論文標題 世界を股にかけての旅稼ぎー小早川秋聲にみる旅と西洋絵画の転用	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『小早川秋聲 旅する画家の鎮魂歌』求龍堂	6. 最初と最後の頁 146-151
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本順光	4. 巻 62
2. 論文標題 露営の夢の行方ー故郷を夢見る兵士の表象と近代日本におけるその転用ー	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大阪大学文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 19-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18910/87418	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 橋本順光	4. 巻 41
2. 論文標題 明治日本を描いた水彩画の展覧会の余白に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『ジャポニスム研究』	6. 最初と最後の頁 80-87
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計18件 (うち招待講演 9件 / うち国際学会 9件)

1. 発表者名 Yorimitsu Hashimoto
2. 発表標題 Who killed John Davis? The Rise and Spread of Japanese Buccaneer Novels
3. 学会等名 The Twenty-fifth Asian Studies Conference Japan (ASCJ), Sophia University (Tokyo), Session 41: Pirates, Spies, and Criminals of War: "Japan" in Narratives at the Edge of Empire (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 橋本順光
2. 発表標題 「和製『宝島』の世界：海賊と倭寇をめぐる物語の歴史
3. 学会等名 大阪府北部コミュニティカレッジ (ONCC) 講演 (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 橋本順光
2. 発表標題 日本文学の近代化とグローバリゼーション：(海洋)小説の翻訳からライトノベルの隆盛まで
3. 学会等名 XIV Congresso Internacional de Estudos Japoneses no Brasil / XXVII Encontro Nacional de Professores Universitarios de Lingua, Literatura e Cultura Japonesa (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年



1. 発表者名 橋本順光
2. 発表標題 ジャポニズムの臨界と変容：ローレンス・アーヴィング脚色の『タイフーン』(1913)上演とその余波
3. 学会等名 国際シンポジウム「Performative Japonisme：「動き」のなかのジャポニズム」(国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 橋本順光
2. 発表標題 蓮と白鳥：グルチャラン・シンの陶芸と朝鮮半島への旅(1920)
3. 学会等名 阪大比較文学会シンポジウム「比較文学の地平と大学人の将来」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 橋本順光
2. 発表標題 「からゆき」の改変 - 近代日本の大衆文学に見るベトナム
3. 学会等名 ハノイ国家大学人文社会科学大学ミニシンポジウム「帝国航路におけるベトナムの存在感 日越仏の結節点」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 橋本順光
2. 発表標題 日本の女海賊の物語はどのように生まれたのか？ ジョン・デイヴィスと倭寇とからゆきさん
3. 学会等名 日越大学ミーディンキャンパス(ハノイ)講演会(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 橋本順光
2. 発表標題 「北極海航路をめぐる幻想と現状」
3. 学会等名 大阪府北部コミュニティカレッジ講演（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 橋本順光
2. 発表標題 “Piracy or Pastiche? Comparative Literature to (un)think about Pirates in Japan”
3. 学会等名 XXIII International Congress of the ICLA(Online)（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 橋本順光
2. 発表標題 ”Palimpsest Pirates: Modern Japan’s Piracy of British Maritime Culture and Nautical Narrative”
3. 学会等名 XXIII International Congress of the ICLA(Online)（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 橋本順光
2. 発表標題 「物語としての義経ジンギスカン説 明治から令和まで」
3. 学会等名 狭山市熟年大学講演（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 橋本順光
2. 発表標題 Suspended or Suspenseful Torture? A History of Rat Torture and Its Transmedial Representations
3. 学会等名 Transcodification: Literatures, Arts, Media, University of L' Aquila, Italy(Online) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 橋本順光
2. 発表標題 『水晶宮物語』(1986)の余白に 交通網の整備とバナナ共和国の誕生
3. 学会等名 日本比較文学会関西支部例会「比較文学研究の拡張と刷新 - 松村昌家先生追悼記念シンポジウム」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 橋本順光
2. 発表標題 昭和天皇の修学旅行 - 1921年のヨーロッパ外遊
3. 学会等名 大阪府北部コミュニティカレッジ講演 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 橋本順光
2. 発表標題 神智学とジャポニスム 三酸図・柔術・能
3. 学会等名 ジャポニスム学会国際シンポジウム「ジャポニスムと東洋思想(宗教・哲学・美学): 19 - 20世紀」(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 橋本順光
2. 発表標題 明治期の英国に柔道を根づかせた上西貞一
3. 学会等名 大阪府北部コミュニティカレッジ講演
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 橋本順光
2. 発表標題 露管の夢の行方ー故郷を夢見る兵士の表象と近代日本におけるその転用ー
3. 学会等名 阪大比較文学学会シンポジウム「故郷と異郷をめぐる比較文学 第一部近代日本における異郷と故郷の相克」（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 橋本順光
2. 発表標題 日本におけるダンピア航海記の受容と変容ー海賊から博物学者までー
3. 学会等名 阪大比較文学学会学位論文発表会（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 武田雅哉, 加部勇一郎, 田村容子編著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 6
3. 書名 中国文学をつまみ食い - 『詩経』から『三体』まで	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

## 6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 ハノイ国家大学人文社会科学大学ミニシンポジウム「帝国航路におけるベトナムの存在感 日越仏の結節点」	開催年 2024年～2024年
国際研究集会 日越大学ミーディンキャンパス(ハノイ)講演会	開催年 2024年～2024年

## 8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
イタリア	ラクイラ大学			
スイス	ジュネーヴ大学			
ベトナム	ハノイ国家大学人文社会科学大学			
イタリア	ラクイラ大学			
韓国	淑明女子大学校			